

想 続

平和について（その2）

日本想続協会 代表・税理士 内田麻由子

「相続が争続にならないように遺言をつくりましょう」といわれますが、遺言があってもなくても、争う家族は争います。相続の問題に限らず、家族が互いに争い憎しみ合うことほど悲しいことはありません。平和について考えるというと、「戦争のない世界が平和な世界だ」と思いがちですが、もっと身近な段階で、平和のために私たちが日々の暮らしの中でできることや心がけについて考えてみます。



● ホ・オポノポノで解決

「ホ・オポノポノ」とはハワイ語で、直訳すると「曲がったものをまっすぐに直す」ということです。地域や家族で好ましくないことが起こって崩れてしまった人間関係を直す手法です。

たとえば、AがBから暗い夜道でスリをしたという場合に、まずAがBに対して何をしたか、真実の追究がなされるのは欧米と一緒です。しかし次の段階では、Aの母親がAの様子に気がつかなかった責任を認めます。Aの友人もAの挙動不審をほっておいた責任を認めます。BとBの友人・家族も、うかつだったと反省します。近隣の人たちは、街灯の電球が切れていたのにほっておいたと、その地域の共同体の責任を認めます。

周りの人たちは「無視」したことを反省するのです。Aの責任だけを追及せず、皆が「しなかった」自分の責任も総括するのです。そして「自分に何ができるか」を皆が考えます。Aの償いととも、Aがコミュニティのメンバーとして復帰することまで考えているのです。※1

マザーテレサは「愛の反対は無関心である」といいました。失敗した人や弱い立場の人を無視し、差別し、排除するのではなく、「自分にもその可能性がある」と想像力を働かせることが大切ではないでしょうか。

● 迷惑をかけなければ生きていけない

「人に迷惑をかけてはいけない」というのは道徳的には正しいのですが、その言葉の裏には「私は人に迷惑をかけないから、私にも迷惑をかけないでほしい」という本心があるように感じます。しかし、生まれてからこれまでただの一度も人に迷惑をかけずに生きてきた人などおそらくいないでしょう。

私も、赤ちゃんのときは電車の中で大声で泣いたはずです。子どものころはいたずらをして親や先生を困らせたのです。社会人になり仕事で失敗をして上司や先輩にフォローしてもらったことも一度や二度ではありません。子育ても、親や兄弟、親戚や友人、近所の人が支えてくださったおかげでなんとかやってこられました。お風呂の水漏れで下の階に住んでいた人に多大な迷惑をかけたこともあります。数えきれないほど多くの人に迷惑をかけ、助けていただいて、今の私があります。死んだときだって、自分で棺桶の中に入るわけにはいかないのです。

「無縁社会」ということが数年前からいわれています。「人に迷惑をかけてはいけない」という

と、人と人との関係がぷつぷつと切れてしまいます。それよりも、「私も人に迷惑をかけることがあるのだから、困っている人や悩んでいる人にはできるだけのことをしてあげよう」の方が、人間らしい社会ではないでしょうか。たとえすぐには何もしてあげられなくても、「あなたのことを気にかけています」という気持ちを伝えるだけでもいいのです。

● 心の中に平和のとりでを築く

ユネスコ憲章はその前文で「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と宣言しています。

私たちは、自分も過ちを犯すのに人を裁きます。自分にも欠点があるのに人の悪口を言います。自分を変えずに人を変えようとします。自分が正しくて人は間違っていると信じています。自分が大事にされていないと怒ります。

そうではなくて、人のいいところを見つけてほめる。人をありのまま受け入れる。小さなことにはこだわらずに譲る。そのような心がけでいるならば、まず自分自身が心穏やかな毎日を過ごせます。世界平和などというと、私たちにはどうすることもできないと考えてしまいがちですが、私たち一人ひとりが、いつも心を平安にして、ほほえみと共に、身近な人へ愛と思いやりをもって接することが、平和への第一歩ではないでしょうか。

● あなたの家族を愛しなさい

マザーテレサは「世界平和のために私たちにできることはありますか？」と聞かれて、「家へ帰ってあなたの家族を愛しなさい」と答えました。

家族を愛すること。家族と過ごす時間を大切にすること。家族に優しい言葉をかけること。家族に感謝し労わること。家族と共に喜び、共に悲しむこと。それができるならきっと、職場でも、学校でも、地域社会でも、どこにいても、誰といても、ありのままの自分で、自分のいる場所に小さな平和の灯をともしることができるでしょう。

● 常にあなたを軽蔑しません

今年（2013年）は、宮沢賢治の没後80年にあたる年です。賢治が愛読した「法華経」というお経のなかに、「常不軽菩薩（じょうふきょうぼさつ）」という菩薩が登場します。この菩薩は、「私は深くあなたを敬います。あなたを軽蔑しません。あなたはやがて仏になる人です」と言って、道行く人をいつも拝んでいました。拝まれた人は気味悪がって、常不軽菩薩に石や棒を投げつけますが、常不軽菩薩はそれでもなお人々を拝み続けました。どんな人にも仏性（ほとけのこころ）があると考えるのが仏教の思想です。

賢治が手帳に残した「雨ニモマケズ」には、常不軽菩薩への憧れにも似た賢治の人生観があらわれています。

「欲はなく 決して怒らず いつも静かに笑っている」

「あらゆることを 自分を勘定に入れずに よく見聞きして分かり そして忘れず」



平和な社会をつくるには、私たちがお互いに批判し合うのではなく、お互いを拝みあうことが大切なのです。拝むとは、すなわち相手を尊重して大切に想うことです。

親は子を拝み、子は親を拝み、夫は妻を拝み、妻は夫を拝み、そして兄弟同士、友達同士、共に働く仲間同士、地域に暮らす人同士がお互いに拝みあえば、だれもが今よりもずっと生きやすく、優しい社会になるのではないのでしょうか。